





日本福祉大学 ▶ 1953年中部社会事業短期大学開学。1957年、日本福祉大学に改組
▶ 8学部10学科 ▶ 学生数は約12000人(うち通信教育課程が約6600人)
▶ 地域オフィスは東京、大阪、松本、福岡、名古屋、山形最上、富山、豊橋、岡山の9つ

日本福祉大学の取り組み

課題

- ▶ 高大接続改革に沿った各事業の見直し
- ▶ 福祉系の大学・学部が各地に設置されたことで、地元以外からの入学者が減少

	見直し前	見直し後
方針と重点施策	▶ 「ふくし」*の考えを広めることを目的に学園創立50周年記念事業として福祉文化創成事業がスタート	▶ 福祉文化創成事業のうち高大連携事業を重視 ▶ 高校との関係づくり、関係強化では、積極的な価値創造に取り組む
組織体制	▶ 教育文化事業室が事業の企画運営を全て担当	▶ 事業の担当部署は教育文化事業室で変更なし。事業開発室に所属していた地域オフィスを教育文化事業室に移管(2015年) ▶ 地域における高校との接点づくりは地域オフィスが担当。さらに、地域でのイベントを企画するまでに機能を拡大
成果指標	▶ 学生募集では定員充足率を重視	▶ 学生募集における指標は変更なし
高大接続改革への取り組み	▶ 「高校生福祉文化賞エッセイコンテスト」を含む福祉文化創成事業全体を地域オフィスも担当 ▶ 「福祉教育研究フォーラム」「高校生と大学生のつどい」は、地元の高校中心に協力をいただき、共同で企画運営している	  <p>エッセイコンテストの入賞作品は審査員の講評と併せて冊子化(左)毎年8月に開催している「高校生と大学生のつどい」。全国から100名近い高校生、大学生、教職員が美浜キャンパスに集まり、「ふくし」について語り合う(右)</p>

高大連携事業の拡充

日本福祉大学

高大連携事業やエリア拠点を通じた高校との関係づくりについて、取り組みの経緯などを聞いた。

高大接続改革を受けて事業の見直しを行う

本学では、環境変化に合わせて高大連携事業を見直し、その改善に努めています。

高大連携事業には、毎年全国から1万通近い応募がある「高校生福祉文化賞エッセイコンテスト」(以下、エッセイコンテスト)や、高校教員の研修・交流の場である「福祉教育研究フォーラム」などがあります。これらは福祉文化創成事業の一環としての取り組みで、「ふくし」の考えを広め、その実現を担う「人財」の養成・輩出を目的としています。

エッセイコンテストは、学園創立50周年記念事業として始まったもので、今年で15年目を迎えます。その間、大学を取り巻く環境は大きく変化しました。その一つが、

高大接続改革の進展です。高校での教育や大学入試で求められる力が変化中、高大連携事業のあり方を見直すことは当然のことだと言えます。

そしてもう一つが、学生募集環境の変化です。福祉を専門的に学べる大学が少なかった時代は、全国から入学者が集まっていた。しかし、2000年の介護保険法施行以降、社会福祉系の大学・学部が各地に設置されると、東海4県以外から本学に入学する学生の割合は徐々に低下していきまし。 「全国」との付き合い方を見直す必要があったのです。

学生募集の枠を越えた高校との関係づくり

本学には全国9か所に地域オフィスがあります。そこでは、福

祉や介護の国家試験対策講座やスキルアップの講習会を実施するほか、地域同窓会の活動支援やUターン就職などの学生支援、エリアでの学生募集の拠点としての活動も行っています。

一方でエッセイコンテストに関する高校との窓口は、立ち上げ当初から、教育文化事業室が担当していました。企画を一体的に推進していくには、担当部署が全て対応する体制が適していたと思えます。しかし、「全国」との付き合い方を見直し、高校との関係強化を図るには、各部署が高校とばらばらに向き合う状態を変える必要がありました。各地域オフィスがエッセイコンテストにも携わることで、進路以外にも高校教員との接点が拡大し、学生募集の枠を越えた高校との関係づくりが進んでいます。

入試改革への対応で高校との関係を深める

さらに今年は、高校との関係を深めることにも取り組んでいます。高校教員を対象として本年の5月に長野県松本市で開催した「書く力UP指導法講座」がそれです。入試改革を見据えて、高校現場では高校生の表現力を高める指導へのニーズが高まっています。エッセイコンテストの実施を通して培ってきた新聞社や高校教員とのつながりを生かして、各地域オフィスを拠点にこうした企画を行うことは本学らしい高校との関係の深め方だと考えています。

今後は、学生を入学前から卒業後まで育てることを意識した入試改革にも取り組み、本学らしい改革をさらに推進していきたいと考えています。



常務理事 副学長 齋藤真左樹

さいとうまさき ● 1985年信州大学人文学部卒(心理学専攻)。旅行会社、情報システム開発会社を経て、1992年12月より日本福祉大学勤務。情報ネットワーク課長、企画課長、学事課長、教育開発部長などを経て、2009年より大学事務局長。2013年より常務理事、総合企画室長。2017年より常務理事、副学長(学生募集・就職・東海キャンパス担当)。

取材・文/見山雄介 撮影/加納将人

高校の視点

将来に向けた視野を広げてくれる授業内容や入試制度に誠意を感じます

聖カタリナ学園光ヶ丘女子高校 進路指導部長 蟹江敏洋先生

▶ 愛知県岡崎市 ▶ 普通科、国際教養科の2学科、生徒数1011人 ▶ 1963年開校 ▶ 創立以来福祉教育にも力を入れている。現在、普通科と国際教養科の2つの学科があり、その普通科の中に文理コースと福祉コースがある。 ▶ 進学実績 愛知教育大、愛知県立大、南山大、上智大、立命館大 他



日本福祉大学には、毎年5~10人の生徒が進学しており、本校で開催している入試相談会にも毎年参加してもらっています。

本校出身の学生に大学の様子を聞いてみると、医療系に進学した学生は講義の内容についていくのがとにかく大変だと言っていました。しかし、同じ志を持った学生や熱心な指導をする教授が多く、高い意識を維持できていると話していますので、いい雰囲気の中で大学生活を送っているようです。国際福祉開発学部に進学した学生からは、アジアでのボランティア活動に参加できるなど、体験型の授業が多く、自分の可能性や能力に気づくことができていると聞いています。

ほかにも、積極的に外部講師を招いて、学生に生きた内容の講義を聴かせていることや、実習を通して、専門分野で活躍している人、海外で長年ボランティアをしている人など、さまざまな人と出会う機会があることは、この大学の大きな魅力であると感じています。そのため、視野が狭いと感じる生徒には日本福祉大学への進学を勧めています。

社会福祉士や看護師、理学療法士など国家資格の取得をめざす学生には覚悟が必要になると思います。そのためか日本福祉大学では、センター利用入試(全学部出願)の合格者を、教職員が入学手続き前に面談することもしているようです。入試でもこの大学の誠意が感じられます。

*「ふくし」は、「ふ」つうの「く」らしの「し」あわせを示している。